



対話形式でひもとかれる “在宅の思考プロセス”

評者 齊藤裕之 山口大附属病院総合診療部・准教授

在宅医療のフィールドほど多職種連携の効果が発揮される場はなく、だからこそ医師・看護師・ケアマネジャーが、それぞれの思考プロセスを共有し、患者のケアに取り組む姿勢が重要である。

本書は、これまで状態が安定している患者宅へ訪問した際、「あれ!? いつもと違うな?」という小さな変化を感じる場面から始まる。「普段は和やかな表情の寝たきり患者の意識レベルがなんとなく変」「ここ1カ月間、食事が徐々に少なくなっている」「オムツ交換をした際に、オムツに少量の出血が付着していた」など、日常の訪問看護・訪問診療で遭遇する頻度の高い状態変化が25話もちりばめられており、看護師と医師の対話形式でお互いの思考プロセスを共有している。

「対話」を通じてナラティブな事例の思考を整理

本書は、医師が看護師や介護職を対象に、遭遇頻度の高い状態変化（発熱、皮膚トラブル、悪心・嘔吐など）へのアプローチを紹介しているが、読み進めることで思考が整理される心地よさを感じることができる。在宅医療は使用できる検査器具が限られるうえに、たとえば「家族がどうしても病院には行かせたがらない」といったナラティブな要素が絡み合うため、適切な判断がしづらい場面が多い。しかし本書では、在宅特有の複雑な判断基準や思考プロセスが、経験豊富な医師と看護師の「対話」を通じて徐々にひもとかれていく。

結局のところ、このような対話の繰り返しが各地域での「在宅医療」の文化を築いているのでは、と気づかされる。

本書は、在宅で遭遇頻度の高い状態変化を体系的に学びたい方、在宅の基本的な考え方や用語に慣れたい方、そして本当はもう少し多職種で対話をしたいと感じている在宅関係者(笑)にオススメしたい1冊だ。われわれの地域でも、「対話」を通じて、その地域に合った在宅医療の文化を築いていきたいと考えている。

G



この熱「様子見」で大丈夫?

在宅で出会う 「なんとなく変」への 対応法

家 研也=編

定価：本体 2,400 円＋税
B5・224 頁／医学書院／2017
[ISBN978-4-260-03168-4]

※連載「総合診療専門医(仮)セルフトレーニング問題」(p.439)の執筆者の1人・家 研也先生編集の本です。連携する訪問看護師や介護職の「なんとなく変なんです…」という報告に在宅医としてどう対応すればよいのか、医師にとっても参考になる内容になっています。
(『総合診療』編集室)